

薬史学会通信

No.37 2004年6月

〒113-0032

東京都文京区弥生2-4-16
(財)学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局

Phone (03) 3817-5821

FAX (03) 3817-5830

「日本薬史学会創立50周年記念事業募金」についてお願い

既に予告しました本学会創立50周年記念事業(記念式典：本年10月16日、於東京大学)の一貫として「日本薬史学会50年史」が薬史学雑誌特集号として発行されますが、その出版費用を含む記念事業の一部を各界有志よりご援助頂く旨、本年度総会で承認されました。この度趣意書がまとまりましたのでここに掲載いたします。宜しくお願いいたします。

日本薬史学会創立50周年募金趣意書

日本薬史学会は、薬に関する歴史の研究によって日本の薬学の進歩発展に大きな貢献をしたいとの目的で、東京大学名誉教授、故朝比奈泰彦先生を初代会長として1954(昭和29)年に創立されました。以後、本会の諸先輩の方々の努力下、日本薬学会年会の折りに薬史学部会を開催して研究発表を、また毎年、研究集談会を開催して会員相互の研究研鑽を重ねてきました。

1966(昭和41)年より学会誌「薬史学雑誌」を原則年2回発刊して研究論文などの発表をしてきました。その後、1985(昭和60)年からは会員の情報誌として「薬史学会通信」を発刊して、本会の研究活動に努めてまいりました。なお、新世紀になってから本会独自の「日本薬史学会年会」を開催して活発な研究活動を行っております。

数年前から日本薬史学会創立50周年を記念して「日本薬史学会50年史」の発刊を計画して編集制作中であります。本誌には柴田承二会長の「正倉院薬物調査研究50年」、「日本薬史学会50年の歩み」、「20世紀の薬学概観」、「13分野の薬学研究50年」、「明治期に創設された薬学校史」に加えて、薬史学雑誌に掲載された「全論文表題の収録」、「本会の講演会、集談会、年会発表演題

などの全記録」、「薬史学会年表」、「医薬史蹟・薬園・薬用植物園の一覧」を収録いたします。文字通り日本の薬学50年を集大成したものです。これらの論文は本会の会員ばかりでなく、薬学に関係する方々にとって貴重な文献としてお役に立つと思います。

この「日本薬史学会50年史」の出版にあたっては、先の本会の40周年記念誌の当時と異なり出版経費の一部を広告収入などに期待出来ない現状であります。このために本誌の発刊を含む記念行事経費の一部を会員の方々からの募金をお願いいたしたく存じます。会員の方々に多大のご負担をおかけしますが、よろしくご協力とご支援をお願い申し上げます。

記

募金額：100万円

一口：2,000円、できるだけ3口以上お願いします(締切は9月30日)

募金は「日本薬史学会50年史」の出版を含む記念行事経費の一部に充当します。

日本薬史学会事務局

日本薬史学会平成16(2004)年度年会研究発表について

本学会創立50周年記念行事挙行的当日、本年度研究発表を以下の通り行います。

申し込み方法：研究発表演題、研究者氏名(発表者に○印)住所を記した書類に、申し込み受理返信用「郵便葉書」を添え、下記申込先に郵送して下さい。論文要旨記述用の所定用紙などを送ります。

申込締切日：平成16(2004)年6月30日

申し込み先：〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16
(財)学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

講演要旨締め切り予定日：平成16(2004)年9月30日

以上

日本薬史学会の創立の頃を回顧して(座談抄録)

日 時：平成16年5月24日午後

場 所：(株)カイノス本社会議室

出席者：(発言順) 川瀬 清
榎田 義彦
山川 浩司
杉山 茂
末廣 雅也(司会)

司会・日本薬史学会が50周年を迎えるので、昭和29年10月の創立大会に出席された榎田、川瀬、杉山、山川先生からお話をお聞きしたいと思います。川瀬先生は50周年を回顧して記録を纏めておられますので、先ず、薬史学会設立の契機を伺いたいと思います。

川瀬・昭和29年4月に京都で開催された薬学大会の生薬学部会で「江戸戯作者の売薬」(佐藤文比古)、「商品学としての生薬学」(川瀬ほか)の二題が発表されました。従来、薬学会の発表はすべて実験結果に基づき成績を発表するのが原則であったので、木村康一先生が違和感を表明されました。その席におられた三共の山科樵作さんはこのような研究も薬学の新しい分野として必要だと痛感されて多くの同志の方に計られて奔走努力されて半年後に薬史学会の創立総会が開催されました。

司会・薬学の歴史について、それ以前はどんな状況でしたか？

川瀬・太平洋戦争中に、帝国学士院の企画で「明治前日本薬物学史」(朝比奈泰彦先生監修)が編集されました。しかし、敗戦という未曾有の事態により、実際の出版は昭和30年代になってしまいました。清水藤太郎先生、高橋真太郎先生などが執筆されています。

榎田・清水藤太郎先生は昭和24年に「日本薬学史」を刊行されました。これは、未刊行となった原稿を基本に執筆されたものです。これにより、清水先生は、東大医学部より薬学博士の学位を授与されましたが、主査は薬学科の教授ではなく医学史にも詳しい緒方富雄教授でした。

昭和23年3月に東大薬学科昭和21年入学のクラスの学生が主催した薬学講座がありました。私は医学部大講堂で薬学史概要を学外も含む多数の聴衆に講義しました。その時作ったガリ版のプリントが最近見付かりました。お目にかけましょう。

出征中に留守宅が戦災に遭い、図書を焼失してしまったにも拘わらずよく纏めたと思います。

戦後、自由にもの言えるようになると、科学史の分野にも新しい考え方の波が打ち寄せてきましたね。

山川・当時、東大薬学科の中で辰野高司さんが中心となり、若手が夜、蕎麦屋の二階で勉強会をやりました。薬の物質性、有効性、経済性などを論じました。その成果を昭和30年に薬史学会が初めて出来た薬学大会で発表しました。また、この話を東大駒場キャンパスで行われた「科学史連合シンポジウム」で発表したとき、多くの意見を頂いたのを記憶しています。

杉山・私は千葉大にいた時、日本の歴史を考察して、先ず中世に注目して、中世薬剤師の活動を同じ薬史学会で報告しましたが、そのとき宮木高明先生は積極的にバックアップして下さいました。

川瀬・山科さんは朝比奈先生を会長をお願いして、今の言葉で表現すると薬史学会を僅か半年で立ちあげて、清水藤太郎、木村雄四郎、吉井千代田の諸先生と共に常任幹事として学会運営に多大の努力をされました。薬史学会で発表された報告や薬史学会らしい行事である「史跡めぐり」の記事が「薬局」に掲載されたのは清水先生のご厚意によるものであり、会誌、会報を出す負担が軽減されました。当時は現在のような事務局の体制もなく、残念ながら記録は完全に残っていません。創立された時は、会の事務所は東大の薬学科内に置かれていたのは、会則に記されていただけで、そこでの活動は殆どなかったと見るべきでしょう。

木村雄四郎先生が居られた神田駿河台の日大薬学科に事務局が移転した昭和41年に薬史学雑誌が刊行されるようになりました。滝戸道夫先生たち教室員の支援があった事と思います。

司会・予定の時間となりました。将来のことについての御意見を簡単にお話下さい。最後に薬史学雑誌の50年記念号の編集に携わった川瀬、山川両先生から一言お願いします。

川瀬・価値の創造、潜在的なものを評価する力をつけること。歴史は繰り返すから、絶えず問題意識を持つということでしょうか。これから薬学史を勉強しようという若い人達のためにしっかりした通史を作ってオリエンテーションすることも必要ですね。更にこういうことは既知のことで、研究とはここから先で、それにはどのような本を読めば良いかと言うようなことの指導も必要ですね。

山川・過去50年間の薬史学会での研究発表、薬史学雑誌の論文の題目を高橋文さんと協力して纏めました。薬学という山の裾野が近年著しく広がって来ました。まずは薬史学で、取り上げられてきたのはどの分野であり、どのような分野は取り上げられなかったを明らかにすることから、次のスタートを考えたいと思います。

司会および文責(記録より抄記) 事務局 末廣